

地方私立大学生の就職意識に関する調査

藤本佳奈

(2009年10月6日受理)

The Survey of Regional Private University Students' Ideas about Being Employed

Kana Fujimoto

Abstract: In recent year, many universities have employment supports and career education for students. In response to this gain of momentum, many survey studies about employment and career supports for students have examined. But, student's ideas about these supports have not been examined well. To provide more fulfilling employment and career supports for students, the study of student' ideas about these supports are needed. Particularly, regional private universities emphasize employment support and career education for students to acquire enrolled students. But, they do not understand student's ideas about these supports. Therefore, in this paper, regional private university student's ideas about employment and career supports will be discussed by focusing on the need and satisfaction to the supports. And on this analysis, to consider diversity of universities, not making regional private universities generalized, the each of university student's ideas about employment and career supports will be discussed. For object of analysis, private A University, private E University, and national F University's second-year and third-year students are selected. The result show that students are highly concerned with the job, and so that they need to acquire the skills for jobs throughout college life. Thus, they need the support for acquiring such skills to university, but their satisfaction to the support is low. Furthermore, the result show that student' ideas about being employed are different in the case of universities, private A University students are lower concerned with the job, and the needs for support are lower than the two other university students. The differences of student' ideas about being employed at each university may be cause by practices agreeable to actual conditions of each university students are provided of students or not.

Key words: university student, ideas about being employed, employment support

キーワード：大学生，就職意識，就職支援

1. はじめに

近年の経済不況や就職状況の悪化により、大学生の就職や職業への関心は高い。大学も学生の声に応えるべくキャリア教育や就職支援に力を入れ始めている。

谷内(2005)によると、「大学にとって就職指導とは、単に学生個人の就職活動を支援するだけではなく、学生の就職率や就職内容(内定先の程度)が大学の評価にもつながるために、入試(入り口)、教育内容や学

生生活と同様に、大学にとってはきわめて重要な要素となっている。」(106頁)という。

このような、大学による就職支援やキャリア教育についての調査研究は、就職環境の変化や大卒フリーター・無業者の問題から近年盛んに実施されている。(例えば、上村2004、堀2007、谷内2005など)。

上村(2004)は、全国の4年制大学の就職指導組織を対象に行った調査(「大学における就職部門の役割・活動に関する調査」)から、大学就職部の就職支援活

動を紹介している。その結果、大学生が内定を獲得するまでの過程において、就職部が重要な役割を果たしていることを明らかにした。他方で近年のインターネットを利用した就職活動については、就職活動を効率的なものにすると呼びかけつつも、同時に生の情報の入手を疎かにさせ、学生が誤った情報に踊らされる傾向が強まってきているという懸念も示している。

また、堀（2007）は、労働政策研究・研修機構が実施した大規模調査をもとに、正社員内定獲得の観点から大学の就職・キャリア形成支援の現状と課題について検討している。その結果、中位ランク以下（偏差値56以下）の大学において大学の就職・キャリア形成支援を利用することが正社員内定に効果を持っていることを明らかにした。

上村（2004）、堀（2007）の共通点はいずれも大規模な実態調査を用いている点である。上村（2004）は、設置者別、大学ランク別の支援への取り組みの実態を、堀（2007）は設置者、大学ランク別に学生の支援の利用状況と正社員内定との関連を見ているが、これらは大学設置者や大学ランクといったカテゴリー別の検討に留まっており、個別大学の就職・キャリア支援に対する取り組みまで踏み込んではいない。

個別大学の取り組みに着目した研究には谷内（2005）を挙げることができる。谷内（2005）は、キャリア教育に先進的な大学の事例を取り上げ具体的な展開方法を紹介している。また、自身のゼミ生に対する実際の就職支援やキャリアカウンセリングの事例を紹介し、実践から得られた、就職指導での重要なポイントを提言している。

これら先行研究からは、大学の就職・キャリア支援の実態や、個別の取り組みなどが明らかになったと言える。しかし、支援される側の学生の意識については検討されていない。大学が提供する支援が効果的に機能するためには、学生の実態に即した支援がなされるべきである。就職支援も、学生がどのような支援を、どの程度求めているのか、その支援を学生がどのように受容し、評価しているのかなど、支援を受ける側の学生の意識を把握することは、より充実した支援につながるだろう。

特に、地方私立大学においては、入学者確保のために、学生の就職やキャリア教育に力を入れている大学は多い。そこでも、大学がどうするかばかりで、学生の意識は見られていないのが現状である。やはり、効果的な支援を提供するためには、学生の支援に対する意識を十分に把握する必要がある。

そこで、本稿では、地方私立大学の学生の就職意識に関して、大学の就職支援に対する要望や満足度に着

目し検討を行う。

2. 分析の枠組み

2-1. 分析データ

2008年10月から2009年3月にかけて、中国、四国、九州、関西地方に所在する11大学（私立大学6校、国立大学4校、公立大学1校）の学生4,363名を対象に行った『大学生の学習経験・生活に関する調査』を用いる。

2-2. 分析項目

今回用いた調査では、大学生の就職意識について集中的に聞いた質問は無い。そのため、「身につけたい知識・技能」「教員や大学に求める支援と満足度」といった質問群から就職や職業に関する項目を採用した。

2-3. 分析対象

これまでの学生調査・研究では、大学個々の特性や多様性があまり考慮されずにいた。今回対象とする地方私立大学の場合、Fランク大学と呼ばれるような、受験すれば合格する大学を数多く含むことから、低偏差値の「非銘柄大学」の中に集約されて語られたり、「都市部」の大学、「地方」の大学という大きな枠組みの中で扱われたりすることが多かったといえる。

一口に地方私立大学といえども、大学の取り組み、地域社会における大学の位置づけ、入学してくる学生の特性により、大学個々に様々な特徴を持っていると考えられる。

そこで本分析では、地方私立大学を一括りに扱うのではなく、対象を数校に限定し、対象大学の比較を通して、各大学における学生の特徴を見ていく。

2-4. 分析対象者及び対象校の概要

分析には、『大学生の学習経験・生活に関する調査』の対象校から地方私立大学の低偏差値校の事例として私立A大学を、地方中堅私立大学の事例として私立E大学を、私立大学の対象群として、国立E大学を

表1. 対象者の属性

性別	大学	男	女	合計	
	私立A大学	57.1	42.9	100.0	(361)
私立E大学	36.5	63.5	100.0	(282)	
国立F大学	26.2	73.8	100.0	(168)	
学年		2年	3年	合計	
	私立A大学	47.9	52.1	100.0	(361)
	私立E大学	60.6	39.4	100.0	(282)
	国立F大学	67.9	32.1	100.0	(168)
専攻		人文	社会	教育	合計
	私立A大学	72.2	27.8	0.0	100.0 (360)
	私立E大学	58.4	41.6	0.0	100.0 (281)
	国立F大学	0.0	3.0	97.0	100.0 (168)

注1) 表中の数値は%, 括弧内の数値は有効回答者数を示す。以下同様。

注2) 専攻の分類は学科により分類した。

選定し、3校共通してサンプル数の多い2年生、3年生を対象とした。

対象とした3校の特徴は次の通りである。

【私立A大学】

地方都市に所在する共学の4年制（短期大学部が併設）の大学である。前身は昭和40年台に創設された女子短期大学である。その後1990年代に入り4年制となり、その4年後男女共学となる。学部は短期大学部の他、人文系の1学部で構成され、学科は人文科学系2学科、社会科学系2学科で構成されている。2010年度版の河合塾偏差値ランキングによれば、偏差値は30台である。

【私立E大学】

地方都市に所在する共学の4年制大学である。戦前に創設され、社会科学系の学部が中心となり発展してきた。現在の学部は、社会科学系の学部が3学部、人文系の学部が1学部、保健系の学部が1学部の計5学部で構成されている。なお、私立E大学が所在する県には共学の4年制大学がE大学と国立大学の2校しかなく、同県の高校生にとっては重要な進学先となっている点も私立E大学の特徴である。河合塾の偏差値ランキングによれば、分析対象とした学部偏差値は40台である。

【国立F大学】

地方都市に所在する国立大学である。学部は、教育系1学部、社会科学系2学部、工学系1学部、農学系1学部、医療系1学部の計6学部で構成されている総合大学である。河合塾偏差値ランキングによれば、センターランク（前期試験）は60%台である。（ただし、医療系学部は80%台である。）

なお、対象とした大学の所在する県は異なっている

が、全て県庁所在地に位置している。

3. 分析結果

3-1. 大学生の就職意識の特徴

ここではまず、大学生の就職意識について、就職や職業以外の項目にも着目しながら、対象となった大学生の就職意識の特徴を見ていくことにする。

(1) 大学生生活を通して身につけたい知識・技能

表2-1には、大学生生活で身につけたい知識・技能・態度についてどの程度身につけたいか聞いた結果を示している。ほとんどの項目で「ぜひ身につけたい」「身につけたい」を併せると90%以上が身につけたいと回答している。

「ぜひ身につけたい」と回答した比率が高い項目をみていくと、「社会常識」75.9%、「卒業後の仕事に役立つ知識技能」75.8%、「文章で事実や自分の考えを説明する力」75.7%、「幅広い知識」72.6%、「プレゼンテーションの能力」71.6%となっている。これらの項目を見ると、概して、社会に出てから役立つ知識・技能といえないだろうか。すなわち、「社会常識」は、社会に出てから必要な知識や態度であるし、「文章で事実や自分の考えを説明する力」や「プレゼンテーションの能力」は、職場で求められる能力である。「幅広い知識」も専攻分野の知識に限らない、社会に出たとき役に立つ知識を想定しているともいえる。

このように考えると、「卒業後の仕事で役立つ知識・技能」と具体的に明示した項目に限らず、大学生は将来の仕事、社会に出てから役に立つと考えられる、知識や技能を求める傾向にあるといえよう。

次にこれらの知識・技能・態度が現在（調査の時点）どの程度身につけているのか見ていこう。表2-2には

表2-1 大学生生活を通して身につけたい知識・技能・態度

	ぜひ身につけたい	身につけたい	特に思わない	合計
文章を読んで理解する力	63.7	32.5	3.8	100.0 (807)
文章で事実や自分の考えを説明する力	75.7	22.5	1.7	100.0 (808)
プレゼンテーションの能力	71.6	25.2	3.2	100.0 (807)
数理的な処理能力	33.5	44.2	22.3	100.0 (806)
論理的な思考力	53.5	39.1	7.3	100.0 (803)
幅広い知識	72.6	25.2	2.1	100.0 (808)
自分の将来の方向を考えること	68.4	28.0	3.6	100.0 (808)
外国語のコミュニケーション能力	41.4	37.1	21.6	100.0 (807)
社会常識	75.9	21.8	2.2	100.0 (806)
自分に自信を持つこと	66.5	27.2	6.3	100.0 (808)
他者に対する寛容性	58.5	36.4	5.1	100.0 (808)
倫理観を養うこと	40.4	50.4	9.2	100.0 (806)
自分の大学に対する所属意識	15.8	41.8	42.4	100.0 (804)
自分の専門分野に関する知識・技能	59.2	34.0	6.8	100.0 (807)
卒業後の仕事で役立つ知識・技能	75.8	21.2	3.0	100.0 (807)
卒業後の私生活や趣味で役立つ知識・技能	55.3	36.3	8.4	100.0 (807)

注)「特に思わない」は「特に身につけたいとは思わない」の略である。

表2-2 大学生活を通して身につけたい知識・技能・態度がどの程度身につけているか

	とても身につけている	ある程度身につけている	あまり身につけていない	まったく身につけていない	合計
文章を読んで理解する力	5.6	47.4	42.2	4.8	100.0 (798)
文章で事実や自分の考えを説明する力	3.8	31.7	56.8	7.7	100.0 (797)
プレゼンテーションの能力	2.8	18.8	57.4	21.1	100.0 (798)
数理的な処理能力	2.1	14.0	49.0	34.8	100.0 (798)
論理的な思考力	4.3	24.4	53.3	18.0	100.0 (795)
幅広い知識	1.8	23.9	61.9	12.5	100.0 (795)
自分の将来の方向を考えること	9.2	35.7	42.4	12.6	100.0 (792)
外国語のコミュニケーション能力	0.9	14.4	44.0	40.7	100.0 (793)
社会常識	8.2	52.1	34.8	4.9	100.0 (795)
自分に自信を持つこと	6.7	28.7	46.7	17.9	100.0 (794)
他者に対する寛容性	10.5	45.3	37.5	6.6	100.0 (797)
倫理観を養うこと	5.3	36.2	49.4	9.1	100.0 (795)
自分の大学に対する所属意識	6.3	25.8	47.0	20.9	100.0 (794)
自分の専門分野に関する知識・技能	1.6	29.5	57.5	11.4	100.0 (797)
卒業後の仕事で役立つ知識・技能	2.0	18.6	64.9	14.4	100.0 (796)
卒業後の私生活や趣味で役立つ知識・技能	5.1	30.1	53.8	10.9	100.0 (797)

大学生活で身につけたい知識・技能・態度について現在どの程度身につけているか聞いた結果を示している。知識や技能を「身につけたい」という思いと比較して、現実には「身につけていない」と考えている学生が多いようだ。「とても身につけている」「ある程度身につけている」を併せた比率が50%を超えた項目を見ていくと「社会常識」60.3%、「他者に対する寛容性」55.3%、「文章を読んで理解する力」53.0%となっている。社会性や人間性に関してはこれまでの大学生活で成長していると感じている学生は多い。

「身につけたい」という要望が高かった「社会常識」以外の項目について「とても身につけている」「ある程度身につけている」を併せた比率を見ていくと、「文章で事実や自分の考えを説明する力」で35.5%、「プレゼンテーションの能力」で21.6%と、自分の考えを表現する力は身につけていないと感じている学生が多い。また、「幅広い知識」は25.7%、「卒業後の仕事で役立つ知識・技能」は20.6%と何れも低い比率である。

このように、大学生が在学中に身につけたい事柄は幅広いが、特に、将来の仕事や社会に出た時に役立つような知識や技能を求める傾向にある。しかし、現実にはそれらの知識・技能はまだ、「身につけていない」と感じているようだ。

(2) 大学に対するニーズと満足度

次に、大学に対する要望について見ていこう。表3-1には、在学している大学に求めていることを聞いた結果を示している。要望の高い項目を見ていくと、「就職活動のための支援」で「とても求めている」「ある程度求めている」を併せて93.0%、「自分の教養を広めることができる授業やカリキュラム」で91.6%、「自分の関心のある専門分野が学べる授業やカリキュラム」で91.2%と、就職活動や学習のための支援を求めている学生が多いことが分かる。

特に「就職活動のための支援」については、「とても求めている」が63.6%と高い比率を示しており、就職状況の厳しさが、学生の要望に強く現れている。

表3-1 在学している大学に求めていること

	とても求めている	ある程度求めている	あまり求めていない	まったく求めていない	合計
自分の関心のある専門分野が学べる授業やカリキュラム	49.5	41.7	7.2	1.6	100.0 (810)
自分の教養を広めることができる授業やカリキュラム	40.2	51.4	6.9	1.5	100.0 (809)
楽しく大学生活を送ることができるための大学の支援	45.9	41.2	10.9	2.0	100.0 (808)
資格取得のための支援	48.9	37.5	11.5	2.1	100.0 (809)
就職活動のための支援	63.6	29.4	5.9	1.1	100.0 (810)
補習など学習のための支援	13.4	35.2	45.5	6.0	100.0 (805)
大学事務職員の丁寧(ていねい)な対応	42.0	44.2	11.8	2.1	100.0 (808)
学内の学習施設・設備の充実	47.6	39.6	10.4	2.4	100.0 (808)
奨学金の充実	31.3	31.9	24.9	11.9	100.0 (806)
売店などの施設・設備の充実	54.1	34.8	9.2	2.0	100.0 (808)
大学の図書館の充実	42.2	40.1	15.3	2.5	100.0 (806)
学内で友人と集まれる場所	43.6	36.4	16.0	4.1	100.0 (808)
通学の便利さ	51.6	31.6	12.3	4.5	100.0 (804)
大学が社会において高い評価を受けていること	29.0	40.7	24.2	6.1	100.0 (809)
大学が繁華街(はんかがい)から近いこと	22.7	34.2	31.6	11.6	100.0 (805)
自分の悩みを相談できるスタッフの配置	24.7	37.5	29.4	8.4	100.0 (809)
サークル活動の充実	33.2	33.0	22.1	11.7	100.0 (805)

表3-2 在学している大学に求めていること（満足度）

	とても満足	やや満足	やや不満	とても不満	合計
自分の関心のある専門分野が学べる授業やカリキュラム	5.4	55.5	34.7	4.4	100.0 (798)
自分の教養を広めることができる授業やカリキュラム	3.3	54.2	38.3	4.3	100.0 (797)
楽しく大学生活を送ることができるための大学の支援	7.4	44.7	39.1	8.8	100.0 (798)
資格取得のための支援	9.1	44.9	37.2	8.8	100.0 (795)
就職活動のための支援	8.3	47.1	37.5	7.1	100.0 (794)
補習など学習のための支援	4.5	52.5	36.3	6.7	100.0 (794)
大学事務職員の丁寧(ていねい)な対応	12.4	43.1	30.0	14.5	100.0 (793)
学内の学習施設・設備の充実	11.1	40.6	33.8	14.6	100.0 (796)
奨学金の充実	14.6	56.0	23.5	5.9	100.0 (793)
売店などの施設・設備の充実	11.6	37.3	32.4	18.8	100.0 (800)
大学の図書館の充実	18.1	49.4	24.6	7.9	100.0 (796)
学内で友人と集まれる場所	10.3	41.4	36.5	11.8	100.0 (797)
通学の便利さ	22.2	39.6	23.3	14.8	100.0 (797)
大学が社会において高い評価を受けていること	7.0	44.2	37.8	10.9	100.0 (799)
大学が繁華街(はんかがい)から近いこと	18.6	57.0	17.2	7.0	100.0 (795)
自分の悩みを相談できるスタッフの配置	5.2	43.5	41.3	10.1	100.0 (794)
サークル活動の充実	15.3	44.3	29.1	11.3	100.0 (797)

続いて、これら支援に対する、満足度について見ていく。表3-1に掲載した項目について、どの程度満足しているか聞いた結果を示している。

「とても満足」「やや満足」を併せた比率が高い項目を見ていくと「大学が繁華街(はんかがい)から近いこと」で75.6%、「奨学金の充実」で70.6%、「大学の図書館の充実」で67.5%、「通学の便利さ」で61.8%と、何れも大学の立地環境、施設・設備といったハード面、奨学金といった経済面での満足度が高い。

要望の高かった「関心のある専門分野が学べる授業やカリキュラム」で60.9%、「自分の教養を広めることができる授業やカリキュラム」で57.5%、「就職活動のための支援」で55.4%となっている。過半数の学生は満足しているとも見られるが、これらに対する要望が9割を超えていたこと考えると、現実の満足度との間にはギャップがあるといえよう。

このように大学生は、大学に対して就職支援や学習支援を求める傾向にある。特に就職活動のための支援に対する要望は高い。しかし、支援に対する満足度については、要望と比較すると低く、大学が提供する支援に不満を持っている学生は多い。

(3) 採用に影響を与える項目

表4には企業が採用を決定する際、影響を与えると思うものを聞いた結果を示している。

最も影響すると思われる項目は「人格」(86.0%)であり、次いで「資格」(74.4%)となっている。50%を超えた項目には、「学歴」(53.6%)、「大学での成績」(50.2%)がある。「学歴」を選択している学生が5割程度はいるが、「学歴(大学)さえ良ければ就職できる」という考え方は支持されず、人格や、資格、成績が就職の決め手になると考える学生が多いようである。

表4 企業が採用を決定する際影響を与えると考えられる項目

	影響する	影響しない	計
資格	74.4	25.6	100.0 (800)
学歴	53.6	46.4	100.0 (801)
大学の名前 (社会的評価)	36.5	63.5	100.0 (800)
大学での成績	50.2	49.8	100.0 (799)
性別	12.5	87.5	100.0 (801)
容姿	30.6	69.4	100.0 (801)
サークル活動	21.2	78.8	100.0 (801)
人格	86.0	14.0	100.0 (801)
コネ	30.9	69.1	100.0 (799)

注) 複数回答。

このような学生の意識だが、企業側の意識との間にズレがある。日本経済団体連合会(2009)が企業対象に行った調査によると、選考で最も重視するものは「コミュニケーション能力」の76.6%。次いで、「協調性」(56.1%)、「主体性」(55.2%)と、所謂、人間関係スキルが上位を占める。「学業成績」は6.7%、「保有資格」は0%であった。学生が考えている以上に企業は、成績や資格を重視していないのである。

このようなズレはなぜ生じるのだろうか。仮説的に2つの要因を挙げてみたい。1つ目の要因として、企業が提供する情報の少なさが考えられる。2つ目の要因としては、企業が重視している、コミュニケーション能力や協調性などといった所謂人間関係スキルといったものが非常に曖昧で判断の基準が見えにくいと考えられる。企業側が重視する能力が曖昧で客観性にかけるが故に、学生は目に見える指標として、資格や大学の成績を求める傾向にあるのではないだろうか。

3-2. 大学別にみた就職意識

就職意識は大学ごとに異なっているのだろうか。以下では、卒業後の仕事への関心、大学の就職支援に対する意識、企業採用で影響を与えると考えている項目、これら3点について各大学の特徴を比較していく。

表5 卒業後の仕事で役立つ知識・技能を身につけたい／身につけているかどうか（大学別）

	大学	ぜひ身につけたい	身につけたい	特に思わない	計	
卒業後の仕事で役立つ知識・技能を身につけたい程度	私立A	64.7	30.3	5.0	100.0	(360) ***
	私立E	82.6	16.0	1.4	100.0	(281)
	国立F	88.6	10.2	1.2	100.0	(166)
	計	75.8	21.2	3.0	100.0	(807)
	大学	身につけている	身につけていない	計		
卒業後の仕事で役立つ知識・技能が身につけている程度	私立A	23.4	76.6	100.0	(354)	
	私立E	16.6	83.4	100.0	(277)	
	国立F	21.2	78.8	100.0	(165)	
	計	20.6	79.4	100.0	(796)	

注) ***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05 以下同様。

(1) 卒業後の仕事への関心と現実

大学生活を通して身につけたい知識・技能・態度を聞いた質問から、「卒業後の仕事で役立つ知識・技能」について、「身につけたい程度」、「現実にどの程度身につけているか」を聞いた項目を採用し、対象3大学を比較した。その結果を表5に示している。

「身につけたい程度」で大学ごとに有意な差がみられた。私立E大学、国立F大学で、「ぜひ身につけたい」と回答している学生が8割以上いた。しかし、私立A大学では「ぜひ身につけたい」と回答したのは64.7%に過ぎず、私立E大学、国立F大学と比較して20%程度低い。私立A大学の学生は、卒業後の仕事に対する関心は低いようである。

(2) 就職関係の支援に対するニーズと満足度

表6には、資格取得のための支援、就職活動のための支援をどの程度求めているか、その支援に満足しているか大学別に見た結果を示している。企業の採用に影響を与える項目として「資格」は「人格」に次いで

2番目に多く選択されていたことから、「資格取得のための支援」も就職支援として扱った。

結果を見ていくと、「資格取得のための支援」に対する要望と満足度、「就職活動のための支援」に対する要望で、0.1%水準で有意な差が見られた。また「就職活動のための支援」に対する満足度で5%の水準で有意な差が見られた。「資格取得のための支援」、「就職活動のための支援」に対する要望が、私立A大学の場合他の2校と比較して低いという結果を示している。また、支援に対する満足度をみていくと、私立E大学が比較的満足度が高いという結果であった。

大学別の特徴を概観すると、私立A大学の場合、支援に対する要望も他の大学と比較すると低く、満足度もそれほど高く無い傾向にある。また、私立E大学の場合、支援に対する要望は高く、満足度も比較的高い傾向にある。国立F大学の場合、支援に対する要望は高いが、満足度は低い。

私立E大学と国立F大学の満足度の違いは、私立大学のほうが学生の就職支援に力を入れている、という一般的な傾向が満足度に反映された結果といえよう。私立E大学の場合、就職支援への要望が高い学生に対して満足のいく支援が提供されているが、国立F大学では学生が満足する支援ができていないのだろう。

私立A大学の場合、支援に対する要望が2校と比較して低く、上述したように、卒業後の仕事に対する関心も低い。このような結果となった背景として、大学側の取り組みが影響していると考えられる。私立A大は、就職に対して関心の無い学生に対して、就職や職業に関心を持たせるような取り組みが上手く伝わっていないのではないだろうか。その結果、将来の仕事に対して関心が無い学生は、動機付けられること無く大学生活を送ることになり、関心が無いので就職支援を求めることも無いのである。

(3) 大学別にみた採用に影響を与える項目

次に、企業の採用に影響を与えていると考えられる

表6 大学別に見た就職支援に対する意識

	大学	求めている	求めていない	計	
	資格取得のための支援	私立A	80.1	19.9	100.0
私立E		91.5	8.5	100.0	(281)
国立F		91.6	8.4	100.0	(167)
計		86.4	13.6	100.0	(809)
大学		満足	不満	計	
就職活動のための支援	私立A	49.7	50.3	100.0	(352) ***
	私立E	63.6	36.4	100.0	(280)
	国立F	46.6	53.4	100.0	(163)
	計	54.0	46.0	100.0	(795)
	大学	求めている	求めていない	計	
就職活動のための支援	私立A	89.2	10.8	100.0	(362) ***
	私立E	96.4	3.6	100.0	(281)
	国立F	95.2	4.8	100.0	(167)
	計	93.0	7.0	100.0	(810)
	大学	満足	不満	計	
就職活動のための支援	私立A	54.3	45.7	100.0	(352) *
	私立E	61.1	38.9	100.0	(280)
	国立F	48.1	51.9	100.0	(162)
	計	55.4	44.6	100.0	(794)

表7 企業が採用を決定する際影響を与えると考える項目(大学別)

	大学	影響する	影響しない	計		
資格	私立A	76.2	23.8	100.0	(361)	**
	私立E	68.2	31.8	100.0	(277)	
	国立F	80.9	19.1	100.0	(162)	
学歴	私立A	51.5	48.5	100.0	(361)	***
	私立E	47.8	52.2	100.0	(278)	
	国立F	67.9	32.1	100.0	(162)	
大学名(社会的評価)	私立A	38.2	61.8	100.0	(361)	
	私立E	32.5	67.5	100.0	(277)	
	国立F	39.5	60.5	100.0	(162)	
大学での成績	私立A	53.2	46.8	100.0	(359)	***
	私立E	54.0	46.0	100.0	(278)	
	国立F	37.0	63.0	100.0	(162)	
性別	私立A	13.0	87.0	100.0	(361)	
	私立E	12.6	87.4	100.0	(278)	
	国立F	11.1	88.9	100.0	(162)	
容姿	私立A	35.5	64.5	100.0	(361)	***
	私立E	31.7	68.3	100.0	(278)	
	国立F	17.9	82.1	100.0	(162)	
サークル活動	私立A	19.4	80.6	100.0	(361)	
	私立E	25.9	74.1	100.0	(278)	
	国立F	17.3	82.7	100.0	(162)	
人格	私立A	82.5	17.5	100.0	(361)	**
	私立E	91.4	8.6	100.0	(278)	
	国立F	84.6	15.4	100.0	(162)	
コネ	私立A	29.7	70.3	100.0	(360)	
	私立E	34.7	65.3	100.0	(277)	
	国立F	27.2	72.8	100.0	(162)	

項目について大学別に見ていく。表7にはその結果を示している。「資格」「学歴」「大学での成績」「容姿」「人格」で0.1%水準で有意な差がみられた。

大学設置者による違いがみられたのが、「学歴」「大学の成績」「容姿」の3項目である。国立F大学の学生は、私立2校と比較して「学歴」を選択した者が多く、私立2校は、国立F大学と比べて「大学の成績」「容姿」を選択した者が多い。国立大学の学生は「学歴主義」を支持しており、私立大学の学生は「大学の成績」を「学歴」に代替するものとして位置づけているのだろう。

大学別に見ると私立E大学が特徴的である。「資格」が影響すると答えた学生の比率が私立E大学では68.2%と他大学と比較して低い値を示している。反対に人格の場合、「影響する」と回答した学生の比率は、他の2校が80%台に留まっているのに対して91.4%である。この結果についても就職指導が影響を与えていると考えられる。すなわち、私立E大学では、企業の採用において「資格」は重要視されていない(日本経済団体連合会 2009)という現状を踏まえた就職指導が行われているのではないだろうか。反対に、私立A大学や国立F大学ではそうした情報が提供されおらず、学生は、他の学生と差異化する指標の一つとして「資格」を重視しているのだろう。

4. おわりに

以上、本分析から得られた知見は次の4点である。

- (1) 大学生は卒業後の仕事への関心が高く、将来の仕事や社会に出てから役立つような知識や技能を身につけたいと考えている。
- (2) そのため、大学に対して就職支援を求める学生は多いが、支援に対する満足度はそれほど高くは無い。
- (3) また、企業の採用において重視される項目については、大学生側の意識と、企業側の意識にズレがあった。
- (4) 将来の仕事や就職に対する関心や、就職支援に対する意識は大学ごとに大きく異なっていた。

これら得られた知見について、同じ地方私立大学である、A大学、E大学の差異について考察していく。両大学は、仕事への関心や、支援に対する要望、満足度で違いが見られた。私立A大学の場合は、就職に対して関心が低く、大学にも支援を求めない傾向にある。私立E大学の場合、就職への関心は高く、大学にもそうした支援を求め、支援への満足度も高い。

こうした意識の違いが生じる要因のひとつとして、大学の取り組みが影響していると考えられる。各大学の就職・キャリア支援に対する取り組みについて、大学ホームページに掲載されている情報から検討しよう。

私立E大学では、学生のキャリア形成支援として、自己発見のための「適正検査」が早期(1年次)から実施されている。また、複数回に渡る就職ガイダンス、筆記試験・面接対策、エントリーシート・プレゼンテーションの対策セミナーなどが実施されている。このように私立E大学では、学生の就職・意識を高めるための指導や、実際の就職活動に対する極め細やかな支援が行われている。

私立A大学の場合も、学生のキャリア形成を支援するような授業プログラムや、就職ガイダンス、面接対策や各種セミナーなどが実施されている。取り組みの具体的な内容や、頻度、実施時期などについては不明だが、私立E大学と同じく就職・キャリア意識を高めるような取り組みが行われている。

しかし、本分析では、私立A大学の学生の、将来の仕事への関心は低いという結果を示していた。このような結果の背景として、大学の取り組みが学生に上手く伝わっていない可能性を指摘できる。私立A大学が提供しているプログラムや支援は、学生の能力や特性、要望など、実態に即したものになっておらず、学生に受容されていないのではないだろうか。対して、

私立E大学の取り組みは、学生の実態に即したものであり、学生に受容されている可能性がある。

つまり、各大学の就職・キャリア意識や就職支援に対する意識の差異には、学生の特性や要望など、学生の実態に即した取り組みができていくかどうか、関連しているといえる。

もちろん、各大学の取り組みが、本当に学生の実態に即したものなのか、そうでないのかは検証の必要がある。また、今回見られた大学別の差異には、学生に提供している支援の具体的取り組みの充実度合いが影響している可能性も考えられる。

これらについては、各大学の就職部・キャリアセンターの具体的な取り組みを詳細に見ていく必要がある。この点については今後の課題としたい。

【参考文献・資料】

上村和申, 2004, 「大学就職部の役割とその変化—就職支援からキャリア支援へ」, 永野仁編『大学生の

就職と採用—学生1,143名, 企業658社, 若手社員211名, 244大学の実証分析』中央経済社, 147-169頁。
河合塾, 2009, 「河合塾偏差値ランキング (2010)」

(<http://daigaku.jyuken-goukaku.com/nyuushihensati-ranking/kawaijyuku/2009年8月25日>)

研究代表者 武内清, 2009, 『キャンパスライフと大学の教育力—14大学・学生調査の分析』(平成19~21年度文部科学省研究補助金 研究成果・中間報告書)。日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センター, 2008, 『平成20 (2008) 年度私立大学・短期大学等入学志願動向』

(<http://www.shigaku.go.jp/shigandoukou20.pdf> 2009年7月30日)。

堀有喜衣, 2007, 「大学の就職・キャリア形成支援の現状と課題」小杉礼子編, 『大学生の就職とキャリア—「普通」の就活・個別の支援』勁草書房, 51-75頁。

谷内篤博, 2005, 『大学生の職業意識とキャリア教育』勁草書房。

(主任指導教員 山田浩之)